

函館毎日新聞 「柳川熊吉翁語り残し」

第一〜第二十まとめ（十八欠号）

熊吉さんの話を聞いてみよう

二〇二〇年 令和二年 庚子 十二月十八日

デジタル化作業担当 碧血会会員 福島 誠

函館毎日新聞より「柳川熊吉翁語り残し」一〇二〇について

熊吉翁の声が聞こえてくる

以下は函館毎日新聞 大正元年（一九一二年）十月三十一日〜十一月二十日に連載された「柳川熊吉翁」という聞き書きのデジタル化です。（第十八回のみ図書館所蔵なく欠号。東大明治新聞雑誌文庫にも所蔵されていません）

★以下、新聞掲載時の原文を、新漢字、新かなづかいに変えて復刻しました。特殊な読みの漢字もなるべく生かすようにしていますが、一部に不確かなものも残っています。

★百十年前の新聞記事ですので、現代では使わないような人権上の配慮のない表現や描写が出てきますが歴史的読み物としてご理解ください。

★特に第二回の「吉原の大火」では凄惨な描写があります。気の弱い方はそこを飛ばしてください。

★函館市中央図書館所蔵資料からデジタル化しました。

柳川熊吉翁 語り残し「一」

△波瀾の多い生涯

函館の守護神が鎮座しまして、桃源郷と謳われて居る谷地頭に、更科蕎麦の元祖たる柳川亭のある事は、あまね人の普く知る所であろう。同亭の老主熊吉翁は、蕎麦屋の元祖としてよりも、きょうかく俠客として知られた八十余年間の、波瀾に富んだ生涯は、単に面白いというばかりでなく、当時の世相人事を知るの参考ともなり、殊に函館戦争に参加した実歴などは、好個の史料であるから、翁が八十余年間の奮闘史を紹介しましょう。翁、こんねん今年八十七歳の高齢であるが猶お矍鑠として毫せず、耳は稍々遠いが言語は明らかであるから、此の記事に就て錯誤があると思つたら直ちに注告されたい。記者は直接翁に就いてその実否を糺し、ただ諸君の厚意を無にせざるように努力すべきを約して置きます。(一記者)

△始めて福山に來た

翁は今年八十七歳であるから、文政九の戌の年生れである。その時は松前家はなつて恰度十四代章廣公の治世で、一度は梁川に封を移されたが、文政四年にふたたび蝦夷地を領するの幕命を受けて、外患の警備に急なる時であつたから、松前家の藩士は旧封に復することが出来て、こゝろ愁雲俄にかき消え、桃李一時に開いたような賑わいとなつたけれども露国の來寇の為に北天常に暗澹として安き心とはなかつた。為に十五代

なつて

なつて

良廣公、十六代昌廣公の時代は、何れも黒船騒動の為に悩まされて、藩政といえは北辺防備の外にはない

ような有様であつた。ことに昌廣公の末年には、水戸藩より使者が来て、樺太島を借らんと申込み、松前

へる

ききょう

藩の老臣等殆どその返答に困んで、遂に城を桔梗野の移さんと唱えたものがあつた。其の説は衆議の決

こゝろ

えどはなかわと

するところとなつて、愈々城を移す事となり、江戸の金物の注文をなした。その時熊吉翁は江戸花川戸に

あかがね

そ

「こゝろ」なりすなわ

在つて鍛冶屋に奉公して居つたが、翁の主人は赤金を注文を引き受けたので、夫れを福山に送る荷物頭乃

ねん

ねん

ち采領する人の下役になつて、月余の長途を旅行して三厩から福山の城下に渡つたのは抑も翁が北海道

そ

の土の踏み初めてである。それはちょうど翁の二十一歳 弘化三年午の歳であつた。然るに福山に着いた所

ほくちんのさやぐ

とうせ

が、藩主が移城の事を憤つて「吾は四百年來の祖業を享け北門の鎖鑰を守り居るのに、班位の等差こそあ

れ同じく諸侯であるのに、水戸候なればとて、私に封境を借すの理あらんや 強いて望むとならば、水戸
全国と夷地全島と交換すべし」といきまいたので、国老も縮み上がって、遂に桔梗野の城は立ち消えとな
った。翁等は築城せば何か仕事に有りつくつもりであつたろうが、恚^いな始末にて沙汰止みとなつたから、
止むを得ず渋々ながら江戸に帰った。

柳川熊吉翁 語り残し「二」

△大地震と大火

折角金儲けの蔓^{むす}にありつこうと思つて、遙々、花のお江戸から熊の棲^{すみ}という恐ろしい蝦夷が島は福山の城
下まで渡つて来たが、^{あかがね}的事はすっかり向こうから外れて、城を移すことは沙汰止みとなつた。が、約束し
た銅^いだけは松前公が引き受ける事になつたから十分な手当を貰つて、再び江戸に戻つたが、翁の生まれ
場所は鯨背^いで売つた花川戸であつたから、見よう見まねで、本職は鍛冶屋でありながら賭博の腕ばかり鍛
えて、知らず知らず日蔭^さの南五味子となつた。斯くして四五年を暮らしている間に、江戸の大地震に逢
つて、吉原の平野屋の借家に居つたが、弱り目に祟り目の譬^{たとえ}の如く、地震の混雑が片付かぬ内に、吉原
の大火と来た、其の時の惨憺^じたる有様は、今想ひだしても慄とする位で、遊女の焼死したものは何百人あ
つたか知れぬ。其の時代では吉原が焼けると馬道町^{うまみちぢやう}に八カ月間の仮宅を許す定めになつて居つたが、地
震と家事との騒ぎであつたから、特別を以て五百日間の仮宅営業を許す事になつたのでも、並大抵の混雑
でなかつたことは知れる。

△臨時隠亡となる

吉原の焼跡を片付けるために沢山の人夫は入込んだが、二三百人の女郎^しの屍骸^あは彼方此方に散らばつて、
手の付けようも何もない。中には焼け切れないで腹綿^{はらわた}が出て居つたり、頭が潰れたり、手足が折れたり、
生々しい女の屍骸と来て居るから、薄気味わるくて實際二目と見られたものでなかつた。そこで家主から
頼まれて、此の半焼^{おた}の女郎等を火葬することになつたが誰手だつて好い気持ちはしない。只だ一人を焼け

ば二分二朱といふかねの威光に依るのだから、引受けるには引受けたが、面倒臭いから鉤を屍体に引つかけて、大道を引擦りながら廓内の隅に寄せ集め、十人も二十人も一所に積み重ね、うえに薪を載せて掻き散しながら焼いたのだから、誰の死体やら誰の骨やら知れるものではなかった。

しうけいけい

△所払を喰った

自分ながら乱暴とは思つたが、實際、金が欲しかったので、そんな事は少しも考えずに、彼れ是れ百人も焼いたろう。所が其の焼方は余り酷い、犬猫の屍骸でも自分の飼つたものなら、斯くは粗末になるものでないという議論が喧しくなつて来て、女郎の親方達は揃つて来て「誰れに断つて自分の女供を焼いた…」などと烈しい談判は来た。一通りの言訳はしたが、實際遣り方はひどかったので、町内の役員などにも知れ渡り、遂うとつ所払いという浮き目に遭つた。併し其の時は別に妻子などの手足纏がなかつたから気軽なもので、隠亡して得た金は百両ばかりあつたから、夫れに元氣を得て、浮浪人となつた。

柳川熊吉翁 語り残し「三」

ぜげん

△女衞に救わる

所払いを喰つて居所にまごついて居た所が其の時同じ町内に女衞の新兵衛というものがあつて、その人が口を利いて呉れて漸く許されたが、此の新兵衛の娘にお菊と言って、夫れはそれは美しい女があつた。所が松戸から来た大尽とばかりで名も知らないが豪い服装をして金放れもよく如何にも大金持ちの旦那のように見えたので、新兵衛も欲からその大尽を手に入れようと思つて娘のお菊を囑に使つた所が中々調子が甘くいつたので新兵衛喜ぶこと並々ならず、何や彼やとでご機嫌を取つて居た。

△貸長屋の相談

大尽というのが、新兵衛の腹の底を充分読んで居るので、大威張に娘を自由にして首尾は上々であつたろう。其の内に俺等とも知己になつたが、新兵衛の口から大尽の資本で貸長屋を建てるという相談があつた。夫れは花川戸の助六屋敷が其の時戸沢助六という人の持物で広い地面であつたから其処に長屋を建てる

ならば大した儲けになるのは判り切つて居る。そこで其の大金とも相談して、いよいよ建てる事に極まり俺と専蔵と二人で支配の栄蔵という人に、土地の借用を申し込んだ。

△マンマと喰わされた

所が栄蔵という人のいうには、お前を馬鹿にして言うのではないが、あの広い地面に家を建てるのであれば二千や三千の金はなくてはならないよ、お前等が夫れが承知ならば貸してやるサと、頭から馬鹿にされたよ
うな風であつたから、俺等も厄鬼わざとなつて歴として旦那が付いて居るから二千五千の金は訳はありません
から是非貸して呉れと言うと、そういう約束でもあれば貸すが、能く確かめねばならぬものだよと子供に
言付けるような口振りであつた。それでも承諾して呉れたから喜んで戻つて、其の事を大金に話すと、そ
んなら材木屋に行つて材木の二千石も注文したがよからうと言つたから、夫れを注文するには千両位の手
金を入れなければ、何処でも承諾する所はあるまいから、千両位出して下さいと言うと、お前等は百両宛
も出して、兎に角手金を入れて置けと言われたが、専蔵にも俺にも百両などの纏まとつた金の有るう筈はな
いのだ。

△化けの皮は剥げた

其の言分は頗る癢かゆに障つてならず、金を出すから借れて来いと言って居ながら、俺等に百両宛出せとは
何の事だ、人を馬鹿にするも程がある、百両程の金があるなら誰れが貴様らに使われるものかといきまい
て専蔵は大金の所に談判に出懸けた。手金てきんがなければないでよい、俺等の顔を立てて呉れと持込んで、果
ては大喧嘩となつたが聞けばポンポ師ぽんぽしといつて、今の三百のようなものだという事は知れたので、開い
た口が塞がらず、オヤオヤと此方こなたから遁にげたが新兵衛しんべゑこそいい馬鹿を見たものサ。

柳川熊吉翁 語り残し「四」

△新門辰五郎に継つがる

キンポ師に誑だまされた事が判つて、喧嘩はしたが相手が相手だから、此方から手を引いて後の始末を考えた。
栄蔵の所へは欺だまされたとも言えぬから、専蔵と二人で頭を鳩あつめて相談した結果、新門の親分に頼むことになった。其の時浅草観音の裏の所に居た新門を訪ねて、キンポ師に引つかかった事を話、今は引くに引かれぬ場合になったから助けて呉れと言つた所が、新門も大いに同情して呉れて、そんなら俺が長屋を建てやるから、お前等は借れる人を心配して直ぐ塞げるように骨を折れとの事であつたから、私等も安心して居て新門の親分は芝の市兵衛町にイナゲ長屋があつて、其処の店頭をしておる専太郎というものに世話して呉れた。

△再び破綻となる

専太郎は店頭であるが、吉原に貸座敷を持つて可なり顔の売れた人であつた。新門から声がかつて専太郎を訪ねた所が、専太郎もさっそく相談に乗つて呉れて、一戸一日四〇〇文ずつに貸すという事に極めて、いよいよ普請にかかつた。一文無しの事であるから随分骨が折れたが、如何にか工面して大工に幾らか手金を入れて兎に角着手したので俺等も大に喜んで早く出来て呉れば儲けることは出来ると思つて、毎日普請場に詰めて急がして居つた所が、専太郎から組合から脱けると断りの手紙が来た。其の言分いふぶんは一日四百文に貸すより二百五十文に貸す所はある、其方は自分に取つて利益であるからお前等の方は断るとの事であつた。吃驚きつこんしたじやないか、専太郎は組合から出れば、金主はないから工事をやめねばならぬ、是迄の苦心は水の泡になつて仕舞うから残念で溜らず、専蔵と二人で専太郎の所に談判に出掛けた。

△専太郎を縛つた

大に憤慨して専太郎の所に行き、文字も知らない我々に手紙をよこして組合から脱けるとはどんな了見か、と啖呵を切り始めてたが向こうは我々よりは顔が大きいので、百よりも二百五十の方は安いから断つたのだ、文句があれば勝手にすれと、テンデ相手にならない。此方も癪に障らア、見損ねなとばかり、ポカリ一つ喰わしたから溜まらない、三人入り乱れて喧嘩であるが、俺は若いときには力があつたから滅多

には負けることはない。其れに専太郎一人に二人^{かかり}兎だ。力で押し^へし^く圧して、縄で縛ってしまった。サア此の始末を付けて呉ねば、此の通りだと柱に括^くって坐り込んだ。

△危ない瀬戸際

専太郎が縛られたということは聞こえたものだから、専太郎の乾児等は、寄るはよるは百人ほどもあつたろうか、此方もそうなれば破れ^{やぶれ}被^かれである。敷居一寸でも這^{はい}入れば、専太郎を踏み殺すぞと怒鳴り付けるので乾児等も家には這入らず、俺等を遠巻^{とほまき}にして吉原からは生かして還さぬと力味^{りき}んで居るので俺等も薄気味が悪くなつて来た。実に危ぶない瀬戸際と来て居る。

柳川熊吉翁 語り残し「五」

△往来止めの大騒ぎ

専太郎の家に喧嘩があるという事は、夫れから夫れへ伝わ^{こぼ}つて、乾児は駆け付けて来る、野次馬は出て来る、場所は場所であるから往来に人波を寄せて、交通止めという騒ぎ、広い場所に出ての喧嘩なれば専太郎には沢山の乾児があるから俺等^{わし等}はとも及ぶものでないが、咄嗟^{とつた}の出来事であつたから甘く縛り付けた。併しこんな騒ぎになつた上は、一寸でも戸外に出ると殺^{ころ}られるから、強^つそうな事を言つて、専太郎の不埒^{ふらち}を罵^{のの}つて居るものの、その実は専太郎の傍を離れると危ないから自分の身を衛^{まも}るための窮策^{きうさく}であつた。

△殺すか殺さるるか

こんなに騒ぎが大きくなると、其の結局は如何なるものかと、自分ながらも心配になつて来た。設^{たと}令^え殺される^{たえ}とて専太郎は我々に降参するものでない事は判^わつて居るし、我々から縄を解^わいて謝罪^{わび}するとすれば、専太郎も乾児も承知するものでないし、向うを殺すか殺さるるか二つに一つを選ばねばならぬ破目^いとなつた。専太郎を殺せば俺等二人もやられるし、専太郎を放せば俺等二人だけやられるのも意生^{いき}地^じがないようである。どうせ殺られる事なら、冥土の道連れに専太郎をも伴^われて行^いこうかしらと口には言^いわねど、二人の顔にはちゃんと読^よまれて居る。

△地獄で仏の思い

往来はワアワアと騒いで居るが、家では三人きりの押し問答、何時果つべしとは思われない。其の時、群衆を押分けてご免なさいと入って来た者はあつた。乾児でないかと思つて凝と眺めると、着流しのままで別に喧嘩の加勢とも見わないから、別に咎めもしなかつたが、会釈しながら俺等の傍に坐つて「私は紀の字屋という小店のものであるが、此の喧嘩は私に預けて呉れまいか 屹度お主等の顔を立てるから・・・」との事である。俺等も後始末に困つて居つた時であるし「顔を立てて呉れるなら、好きな喧嘩でもない・・・」とて、専太郎の縄を解いてやつた。専太郎よりも此方では地獄で仏に逢つたような心地がして能く来てくれたと心の中で紀の字屋を拝んだ。

△初一念を通した

紀の字屋というのは、吉原で小さな貸座敷をやつて居るが、人間は確かりして、言う事は能く理解つて居る。此度の喧嘩の原因を聞いて、それは実に氣の毒である。専太郎の代わりに俺は加入して、お主等の初一念を通うさせるから安心すれとの立派な扱い方であつた。俺等は之れで何の不足も有ろう筈がなく、夫れでは頼むというて無事に分かれた。紀の字屋の今度の扱方は実に立派なもんだという評判はバツト高くなつて、借家する人たちは紀の字屋の長屋に行けというような人氣で、建物は出来上がると直に片つ端からドンドン借人があつて残らず塞がつて仕舞つた。

柳川熊吉翁語り残し「六」

△仕出屋の開業

いろいろ心配したが、紀の字屋の力で長屋は出来たから紀の字屋に店頭になつて賣つた所が、非常な人氣で、直ぐに店が塞がつてしまつて、今迄は淋しい原であつたが一通り町の形になつたので、俺も専蔵と相談して台屋を始めた。俺はうちで料理の方を引受け、専蔵は外の出前とか取立とかを引受けて、二人で

懸命に働いたので、大層繁昌するようになった。そうなると人間というのは情けないもので、油断が出て来るものである。

△賭博で失敗する

俺は元來賭博が好きで、夫れで好いこともあつたが、先づ悪い方は多かつた。台屋も少し繁盛するようになった所で、好きな賭博の虫が頭を擡もたげて堪え切れない、二進も三進も利かぬ時なら、斯うしても居られぬと自分の心を制止むることも出来たであらうが兎に角、今日明日に困らぬようになったから、一寸位はという心の油断から、一度は二度三度五度と足繫く賭場に入りするようになっては、料理などは五月蠅うるせくて遣つて居れず、雇人等に任せて仕事に情けたから、紀の字屋には信用を失い、得意は漸々減つて左前になつて来た。

△家業盛り返しの策

是れでは行かぬと始めて気が付いて、専蔵とも相談した。こんなに信用を無くした上は少しばかり勉強したとて、盛り返しは付くものでない、ズツと目立つた事をせねばならない。それをするには我々の瘦腕ばかりでは如何にもならぬ、それには新門の親分より頼る所はないが、親分に取り入る方法はないかと、いろいろ相談した所が、幸いにも巧いことを考え出した。

△嫁の取持で繼る

専蔵の姉は、其の時或る旗本の妾であつた。旗本との間に出来た娘に、お安という綺麗なのがあつて、それは岡引の頭、久蔵というものの世話で、常磐津の師匠の息子の安太郎に片付く事に極まつて居た。其の安太郎というのは今でも十一代目の師匠となつて、未だ生きて居るとの事であるが、専蔵はお安の叔父であるから背に腹は代えられず安太郎の方の縁談を断つて、新門の三男元吉に世話した。新門には長男仁三郎、二男松太郎と此の元吉と三人あつたが、評判娘のお安を遣つたので親分も大喜びであつたし、行つたお安も、其の時は清元に圧倒されて生活向きの充分でない常磐津の息子に嫁くよりは仕合せであつた。

△嫁の恨みで破滅

専蔵も俺わしも思う通りに出来て大喜び、新門の方でも良い嫁を世話して呉れたとて大喜び、殊に専蔵は新門と縁族という間柄になったので、別に斯うして呉れと頼まぬ内からお客はボチボチ殖えて来て、店は忙しくなつて来た。之れで世間が円く行くものなら結構なものだが、中々そんなものではない。此方は大喜びであるが、嫁を横取された安太郎の方を思えば、どんなに口惜しかろう。又、媒なぐさした久蔵の無念はどんなであつたろう、無理はない。久蔵は岡引の頭を笠に着て遂々俺等二人を附け廻し、専蔵は伊豆の新島に流罪になつたし、私は辛くも江戸を逃げて、北海道まで来るようになった。当時の事を想い起こせば、久蔵の遣り方は余りだと腹立たしい事もあるが、俺等わつらのやり方も随分過ぎてあつたからね。誰を恨むでもない。先ず一服して、流罪や逃亡した顛末を話しましょう。

柳川熊吉翁語り残し「七」

△岡ツ引き久蔵の悪辣

娘を横取りされた恨みで、岡ツ引き頭久蔵は専蔵を憎むこと一方ならず、何か機会があればと、狙つておつた所が、新門の縁族で売り出した台屋の繁盛は非常な勢であつたから、多少の無理もあつたろうが、科という程の科でもなかつたのを、平素から悪まれておるから、押売というで大番屋にて呼ばれて調べを受けた。

△逃走したとの冤罪

併し押売という罪名だけでは、重い仕置にもならないが、聞くも恐ろしい白洲破りびやくしやうやぶりという冤罪を被つたのである。専蔵は別に逃げたのも何でも無いが、久蔵がそう拵うづめえたので。如何いう訳かというと専蔵は一応の取調が済んで、白洲に控えておると、傍に付いていた岡ツ引きの久蔵は、後から専蔵の尻の所を突いたから、専蔵は御用が済んで帰れということだと思つて、ツト立つて白洲を出かけると、久蔵は声高く白洲破りだと大喝たいかつして、手先の者に否応なしに縛らせた。

△専蔵新島に流罪

専蔵も吃驚して、種々弁疏をしたけれども初めから久蔵が仕組んだことだから、罪を免れることは出来な
いで遂うとう白洲破りという廉で、伊豆の新島に流罪された。なんと乱暴なことではないか、今の有り
がたい御代でも、役人等は無理なことをするとのことであるが、今から四五十年もことであるから仕方が
なかった。専蔵は見し見し無い罪を着せられて七八年も配所の月に泣き暮らしたが、御維新後に特赦され
て、新島から江戸に帰り、今でも確か生存しておる筈である。

△酒の株を奪わる

斯うなつては台屋の商売も面白くなつたから、紀の字屋に頼んで酒屋を始めた。幸いにもこれも相当
に売れてあつたが、其の時、新門の乾児で辰浪という博徒があつて佃島に苦役しておつた。これが拳は名
人であつたが、佃島から帰つて来ても、是れぞという職業がなかつたので、新門に泣き付いたと見え、酒
屋の株を辰浪にやれという呴言である。無理なとは思つたが、新門の親分には何か外に考えもあると思
い、諦めて辰浪に其の株を渡した。

△辰浪との喧嘩

一旦は諦めたが、辰浪の仕振りは横柄である。一応の挨拶どころか、当然のような面付をしておるので、
癪に障つてならず、或る日、酒に勢を借つて辰浪の所に苦情を持ち込んだ。始めから売りに行つた喧嘩
だもの。何で黙つていましょう。忽ち修羅場となつて血は流さぬが、力自慢の俺は十分に暴ばれたので、
戸障子や道具の毀されたことは、実に惨めなものであつた。

△朝湯の帰りを

散々暴ばれてから、独り身の気軽さは其のまま友達の所で泊まり、知らぬ顔に澄ましておつたが辰浪の遣
ろう、素人臭く強請の訴をしたと見えて、襦袢のままで朝湯からプラー出ると、手先が二人待つておつ
て居れの二三間行き過ぎた後ろから「オイオイ熊ア、一寸待てッ」と声を懸けられた。

柳川熊吉翁語り残し「八」

△捕まつては百年目

喧嘩はしたもの、昨夜ゆうへくらいのは、毎晩あるので、正可手先などを向けられることはあるまいと思つていたから、「俺わしのことかね・・・」と振返る間もあらず、二人の手先は素早く左右の袖を捉えて「隙ひまは取らせぬから一寸大番屋まで来て呉れ」とのこと。扱たつなみめては辰浪奴水臭く訴えたのだなと気が付いた。今此処で手向いしても逃げ場はないし、といって大番屋まで行けば、例の久蔵の野郎が居るから、慥どんな酷い目に遭うかも知れない。隙を見て逃げてやろうと思ひながら、二人に連れられて来た。

△濠の中に飛び込む

手先二人位投げ付けることは何でもないが逃げ場は悪ければ直ぐ扱あわてまるばかりであるから、彼れが是れかと考えながら跟ついて来ると、或る河岸かしに出た。此処が屈竟くしやうの逃場所であるから、二人の扱あわてまつていた襦袍をスリ脱ぎ棄やてて、行きなり濠の中に飛び込んだ。二人の周章方はなかつたであろうが、逃げた俺わしも、実は夢中であつて能くも思ひ切つたことをしたものだとは今でも忘れない。

△魚屋の戸棚に潜む

其の時、雷門と今の警察署との間に目白の不動尊があつて、其の側に魚屋の喜助というものがあつた。喜助の家というのは別に妻子はなく、漁とつて来た魚を買つて来て、夫れを洗つて売りに出れば、空家同様になつて居るのを知つて居るから、隠れるには屈竟くしやうの所であるが、何をするにも裸体の儘では、人目に立ちて動けず、いろいろ苦しんでどうにかとがこうにか咎められもしないで、喜助の家に行く事は出来た。案の如く喜助は居なかつた。着物を借る訳には行かず、裸体で居れば、若しや来客などのあつた時に、見咎みとがめられるし、窮屈ながら戸棚の中に隠れようと思つてあわてて飛び込んだ。

△戸棚の中の悲鳴

真暗な戸棚の中、何者がいるか知る由もなく、只だ追手の来ることばかり、恐れていた俺は成るべく奥の方にとまって冷たい手で探ったが、南瓜のようなものに触ったかと思うと「アレー……」と悲鳴したのは確に女の声、続いて「何者だッ」と男の声が聞こえたので、俺は直ぐに合点して「此の不埒者奴ッ」と威かしてやった。所が女は「何卒、許して下さい……」というので此方は急に強がって、兎に角出て来いと引つ張り出した。

△姦夫姦婦を脅迫す

出たのを見ると、身体は人勝れた相撲取で女は何処かの神さんらしい。凄い文句を並べた所で、全く某力士と人の妻との密会だと白状した。俺は此の場合密会などに要はないが、着物と旅費がなくては高飛することは出来ない。人と喧嘩して来て、川筋から逃げて来たのだから、着物を貸せと脅かし付けた。出すには出したが、力士の着物であるから、俺の身体には合わない。併し今は恰好などを言うて居る場合でないから、其の力士の着物を着、旅費を少し貰って、其の夜水戸街道の松戸まで逃げ延びた。馬鹿を見たのは、此の男女、折角のお楽しみを妨げられて……。

柳川熊吉翁語り残し「九」

△一文なしで登楼

少しばかりの旅費を貰ったが、真昼間は大手を振って歩けぬ扮装であるから、居酒屋などで故と日を暮らし、ものの文色は見ゆるか見えぬかという頃に、松戸の町に入ったその時は文なしの素寒貧、宿屋に泊るには格好は悪いし、まさか野宿でもあるまい。死地に入って生きる瀬もありだ、成るより成らぬものとは昔からの譬。儘よとばかり女郎屋に登って、鰯腹食って呑んで、胸を撫でおろしていた。

△孔明以上の妙計

朝湯帰りに、水まで潜って、ならぬ裸体の道中もした上に、戸棚の中で俺等に禁物の芝居も見せられて、何て間が悪い事ばかりと呟しながら、女郎屋に登ったまでは好いが、朝になつての勘定は如何したものか

と思うと、暖かい布団の中でも夢は結ばれない。逃げようと思えば逃げられないこともないが、逃げると明日から宿なしだ。泥棒も出来ぬし、乞食も出来ぬとすれば、飢い思いをせねばならぬ。一文なしの癖に、緩くり寝ても見たいし、宿なしにもなりたくない。随分虫の好すぎる話、神算奇計、勝を千里の外に決するという諸葛孔明にも、此の分別は些と面倒であろうが、其処は死地に入つて生を求むるで、此方のお手の内はこんなものだ。

△ 何も蚊も上首尾

翌日になると、果たして番頭さんから、手詰の談判、参りましたナと腹の中では北叟笑をしておるが、表面には出されもせず、さも神妙らしく小さくなつて「実は仲間の者に持ち逃げされて困つておる。金の代わりに此の身を使つて呉れ・・・」と下手に出ると、夫れは氣の毒の事である。そんなら只という訳には行かぬから、日に二朱ずつ出すから働いて呉れとの頼み、何方が頼んだのか分からぬ位の上々首尾。女の手前には少々バツが悪かったが、其の位はと辛抱して四五十日もおつたから、女郎屋の内幕も分かつて来た。是なら何処へ行つても、飯の食いはぐれはあるまいと、太々しくなつて稲吉という町に逃げて行つて、其の町の女郎屋に前のような手段で働くようになり、夫れから相馬中村の伊勢屋という女郎屋の番頭になることに決まつていた。

△ 不思議な人の運

人の運命というものは不思議なもので、何時どんなに変化するものか、自分の身で自分も解らぬものである。殊に俺等の如くに今日は東に、明日は西にと流れ歩く風浪のものほど変化はげしいものはない。俺は十年ばかり前に一度松前に来た事がある。夫れは前に書いた通りである。其の時から松前は好い所、金の儲かる所と思つて居た。行きたい行きたいと思つて居るが、三十日もかかるので到底望みはないと諦めて居つた所が、相馬で端なくも、松前に渡る手蔓を見付けたので素の考えは勃々と起こつてきて、何も蚊も更置いて、松前に渡ることとなつた。

柳川熊吉翁語り残し 「十」

△奉行のブランさん

松前に渡りたいという希望の遂げらるようになったのは、函館奉行のお伴が出来たのである。其の時は函館奉行というのに二人あって、独りは江戸に一人は函館に在って、一年毎に更代するのであった。江戸の奉行が函館に来れば、函館に居った奉行は蝦夷地を一巡して江戸に帰って行くのである。俺の中村に流れ込んだ時には、竹内保徳さんは江戸から下るのであったが、其の組頭に奥村という人があって、其の人に頼んでお伴に加えて貰った。お伴といつても別に家来という程ではないが、言わば荷物の人足である。人足ならば組頭の一存で出来る事であるから、それになれば別に錢を貰わぬが、三度の食事と宿には困らぬ。如何かして松前まで渡ったならば何とかなるだろうという考えで、肩代わりの人足となった。人足といえは聞こえが悪いが当時はブランさんといつてあった。

△茶代はお客が取る

竹内様の行列に加ってから、道中何も心配なことはなかった。面白可笑しい旅までは行かないが、気楽なものであった。宿屋などで泊まると、一行三十人とか四十人とか引つ括めて勘定するが、組頭などになると其の中から茶代を貰うよといつて、幾千を掻つ浚うものである。何処の世界に、自分で払いをしながら茶代を此方から貰うという法はあるものでない。併し当時の幕吏の下役などは、皆こんな風だった。

△盛岡にて金儲の口

ブランさんになって盛岡まで来ると、好い金儲の口があった。夫れは盛岡の殿様は余程のハイカラと見えて、盛岡城下の人々の詞を江戸弁に直して仕舞いたいというので江戸ツ子を十五人抱えたいとの事であった。給料は当時のお金で八両というのであるから、こんな甘い口はあるものでない。俺も目前にある八両の月給が欲しいから、竹内さまのブランさんを廃て南部様の抱えとなった。仕事は楽であるし、金はあ
るから、身持ちを謹んで居れるものはない。十五人の抱人は揃いも揃って酒色に身を持ち崩した。

△南部弁に化せらる

遊ぶ人々は女の歡心を買うために南部の言葉を真似して毎夜遊ぶにいく。江戸の言葉は段々南部言葉に化つて来た。それでは殿様の考えとは全く違う。始めの月給一月分は十五人とも貰ったが、其の次からは月給を呉れない。只俺ばかりは約束通りに貰った。其の訳は、俺は賭博が好きで、三度の飯を一度にしても打ちたい方であつたから、何処かに良い賭場がないかと、夫ればかり詮議して居って、余り女などには近づかないから、言葉は崩れなかつたからである。斯くして四五ヶ月は盛岡に居つたろうが、其間には随分珍しい話もあつた。所変われば品変わるで、今でも吹き出すようなことを二二三話してみようか。

柳川熊吉翁語り残し「十一」

△鶏卵湯に浴れる
たまごゆ い

其の時の南部公は、誰方でしたかお名前は知りませんが、国の言葉を江戸弁に直したいというお考えの方でしたから、頗るハイカラな殿様に違ひなかつた。独り言葉を直したいと思つたばかりでなく、今日でいう所の人種改良のお考えもあつたと見えて、強い人民を造りたいといつので、城下の何十軒とある湯屋には毎朝鶏卵拾個づつを解いて湯に混れることを厳命した。其の趣意は卵湯に浴いれば身体は丈夫になつた、其の人々から生まれた子供は、更に立派な体格になるということである。随分突飛なお考えであるが、卵湯としては何等の効能もありますまいが、確かに南部藩の人々をして、体育に氣を注げさせたことと想います。南部様の家来に立派な方々の多く出来たのは、こんな子供の戯事にでも、其の精神の程は偲ばれる。

△キンセイ様の奇習

南部領に限つたという訳でもあるまいが兎に角南部領で始めて見た異体の神サマがある。それは男根の形を刻んで、村々では必ず龕を建てて、之を拝まねばならぬ奇習である。其の大なる物に至つては、六尺以上もあつて金粉を塗つたり、金欄の幕を張つたり、実に尊厳にして犯すべからずといったような風である。鰯の頭も信心柄とやらで、有りがたい尊いと思つて拝んで居たならば、他から見るように滑稽でもあ

るまい。ご承知の如く、鹿角郡は羽後と陸奥との間に介在して、其の風俗言語などは秋田と津輕に類似するものは多きに拘わらずキンセイ様の崇拜だけは此の二藩に似ないで盛んであった。これは人民自然の欲求でなく南部公の奨励したものだと思う。

▲この奇習の原因

に就きては少しく、記者の意見をも附記して見たい。乃ち洋の東西を問わず、未開野蛮の民族には男根を崇拜した時代のおつたことは事実である。記者の私考に依ればアイヌ細工の紋様は、男根の彫刻から起源したものだと思つて居るが、爰に記述する必要はない。女家業の者は今でも安置する奇習があるそつだ。して見ると男根の崇拜は南部藩で始めたものでないことは知れるが、南部藩に境を接した津輕、秋田に大なる流行を見ずして南部領ばかりに多いというのは、南部公は敵国に対する政策として強健なる男子を生産養成の目的の爲めに、特に之れが崇拜を奨励したものと見える。決して淫行の爲めではない。前に卵湯に浴れたという趣意から考えても、キンセイ様の国内に鎮座ましますを公許した理由は始めて合点が行くようである。

柳川熊吉翁語り残し「十二」

▲姫君の心機一転

卵湯に浴れたり、キンセイ様を祀ったり、丈夫な男の子を産むようにと奨励した位であつたから、南部様の御殿にも、之を安置してあつたかも知れない。世の仇浪を知らぬ深窓の姫君も、ものの本などに読んだ事があるが、未だ見た事のない異態の怪物を見ては、若き血潮の沸ぎ^たつて、天地配合の機微の、果たして如何なるものかを疑わずに居れぬ。是れが人間の本能である。殊に美食暖衣に飽きて、栄華の生活をなした女性^{じよせい}が、一念爰に至つては一片の理性ばかりで抑え切れるものでない。磨いた心の鏡も曇つて、遂に鳳友鸞諧の奴とならねば止まぬ。動機^{どうき}という者は実に恐るべきものである。南部家の姫様に生まれた方でも、とうとう心機一転して、異性の者を近づけるようになったのは、なんと淺ましい女心ではないか。

▲相手は誰だろう

締りの嚴重な御殿の奥の間に、如何して忍ばせたものか、月日の経る内に袖にも包まれぬ大きなお腹になった。人種改良を奨励しておる殿様だから、姫君の此の働きを褒めそんなものだが、以つての外のお腹立ちで厳しい相手の詮議立、侍女や家来を責めること毎日毎夜で、酷い折檻を加えたけれども一向に相手は知らない。果ては国中にお触れを出して、姫君の相手を知らせたものには何百兩という大金を呉れるといつて詮議したが、夫れでも少しも判らない。殿様の躍起となるのも無理はない。

▲閉門を申付けた

こんなにまでもしても相手が知れぬとすれば、是は人間業ではあるまい。何でも神様の浮氣したろうというので金田一という宿にあるキンセイ様の本尊に閉門を申し付けた。神様も良い災難さ、此の金田一という宿の名はキンセイ様の本元であるから出来た名だそうであるが、其の由来は能く知りません。

其処には立派な堂社があつて、キンセイ様の本家本尊として国の人々の参詣は絶えることはなかったが、姫君の妊娠になった騒ぎから、キンセイ様が夜這に出るのだらうというので、俺に、其のお宮の番人を言付けられた。なんと色消しな話ではありませんか。俺だってこんな神様に罰を当てられては男冥利は尽くるから閉門の番人をお受けしたが、実は神様の自由に出られるように明けっ放して、毎晩賭博ばかりして居った。思えば滑稽の至り

▲酒池肉林の豪遊

こんな馬鹿氣た番人ばかりしても居られず何か甘い汁を吸わねば、埋め合わせが付かないから、柄にもない事だが台屋踊りというものを工夫した。之れは素からあつたものだが、俺のは一通りの型を知つただけで夫れに好い加減な自分流を加えたものだ。全く物になつて居ない。夫れでも江戸弁で殿様の御氣に入つて居ったから、何時でも酒宴の時には踊らせた。其の時、盛岡の城下、川向うに土田という所があつて其処に女郎屋が二三軒あつた。殿様はあの広い岩手川に船橋を架けて、毎晩のように遊女屋にお忍びになる。

俺は何時もお伴で行くが、有らんかぎりの美味佳肴を陳べ花の如く着飾った女どもを大勢寄せてのお遊び、俺に台屋踊を踊らせて、打ち興じて居らるる所は、何処までも殿様は殿様だ。斯うして二ヶ月も遊んで居ると、其の事は江戸に聞こえて南部様の評判は大層悪くなった。そこで仙台様はご親類の事でもあるから、態々江戸に行つて御老中などに取持つて呉れて、漸く無事に納つたが、そうなる俺も居悪くなつて、南部から逃げ出した。南部に居つたのは、僅かに半年ばかりでしたが、随分面白いことはありませんたよ。

柳川熊吉翁語り残し「十三」

▲ 南部の地雷火騒

之れも盛岡の居つた時の事であるが、地雷火を敷設したという騒があつた。何の爲めであつたか、俺には能く判らぬが、清水谷侍従が下るので、松前様は盛岡まで迎えに来られた事があつた。其の時、南部の人で画家の某というのが清水谷様通過の山の上に地雷火を仕掛けて居つた事があつた。清水谷様に遺恨のあつたのか、松前様に遺恨のあつたのか、わし等には判らなかつたが、仙台様などと言ひ訳のために江戸に上がったとの事である。今になったら、何の爲めであつたという事も判つて居ると思いますから俺には関係のない事だが、一寸附け加えて置きましょう。

▲ 函館から福山へ

南部も不首尾になつたから、貯えた金を持つて才更ばを極め込み、南部領の大間から便船で函館に渡つたのは俺の三十二歳の頃であつた。其の頃、俺の知っている寿司勝というものは福山に居つて料理屋を始めて居つたから、函館から更に船で福山に渡つてスシ勝の所で働くことになつた。

▲ 腰の弱い奉行所

福山藩は、隣藩との関係は尠かつたために武士に忌むべき金に齟齬した傾があつた。相手は漁場の請負人とか、諸国の商人等であつたから止を得ぬ事であつたろう。夫れが爲めに士風は甚だ振わなかつた。一例を挙げれば、俺の福山に行った折の事である、京都から医師に野田貞元というものがあつて、其の酒

乱と来たらお話にならぬ。夜中大道を謡^{うた}って歩いたり或は人に乱暴を加えたり、手の付けられないものだが、奉行所では之れを如何ともすることは出来ない。仕方なしに貞元の薬を呑むなど言い触れしめた。之を聞いた貞元、怒るまい事か、直に奉行所の怒鳴り込んで、人の家業を妨げるとは何事であるか、かかる御説があるならば京都の朝廷に訴え出ると脅し付けたので奉行所でも持て余し、漁場請負人等に仲裁して貰い、金五百両を貞元に与えて京都に帰って貰った事があつた。何と腰の弱い奉行ではありませんか。他藩にこんな事があつたら、医者の方で叩つ斬られるのであらう。

▲魚の見分役となる

俺がスシ勝の所で料理の手伝をして居た時、落部から捕れたというて大きな魚を城下に持ってきた。福山の魚屋どもは寄つて集まつて見たが、何という魚か名前さえ判らない。食うものか食わぬものかは猶のこ
と・・・。

そこでスシ勝の所に居る、江戸の料理人に見て貰えという説が出て、俺を迎えに来たから行つて見ると力ジキ鮪であつた。是は斯ういう風にして食えるものだとして説明して教えたけれども魚屋は誰も買うというものはなく、俺はその大鮪をただ貰った事があつた。此の鮪の見立てで俺は大層顔がよくなって、福山の魚屋でも料理屋でも俺を親方のように敬つて呉れました。夫れからというもの、見た事のない魚の捕れた時や又は魚の料理方に就きて、何時でも相談を受けるようになったが、夫れは奉行所にも聞こえ、家老職なども海岸の土地であるのに魚の見分けを知らぬといつては藩の恥辱であるといつて、俺に二人扶持を付けて魚の見分役というものになった。何と奇態な役目のあつたものでしょう。夫れから一人殖え二人殖えて、遂に五人までになった。

柳川熊吉翁語り残し「十四」

▲鯉の着物を造る

其の時、上在から眞鯨が沢山漁れた。土地の人々は毒があるといつて、誰れも食うものはなかった。そこで俺は其の皮で着物を造つて漁夫等に着せた所が、水が弾んで濡れないから大層重宝がられた。それから鯨を盛んに買い集めて、その皮で着物を造つて売り出したら原料は殆貰つたような安値であるのに、多少の加工したとはいえ、只自分の手数を費つたばかりであつたから、面白い程儲かつた。然るに好事魔多しで、之れも故障がはいつて止められた。

▲毒藥を乾かした罪

人間というものは、仕方のない動物で、人の功名手柄を妬んだり人の事業を妨げたり、自分の関係のない事までも、お節介をして呉れるには呆れる。昔ばかりでなく今でもそんな人間は、そんじよ其処らに転がつて居るだろう。嫉妬不快という事は女ばかりでない、男でも随分肝っ玉の小さいものは多い世の中だ。俺は稍々儲口に取り付いて、盛んにふぐの皮を乾かして居つたが、所の者に妬まれて柳川は鯨から毒藥を拵えて居ると言い触したものがあつた。それが漸々広くなつて奉行所まで聞こえて、実地の検分を受けたが、少なからず乾してあつたので遂に毒藥を乾したという咎を受けて鯨の乾方禁止されたばかりでなく、所払にまでもなろうという破目になつた。

▲展開した新機運

然るに茲に局面一転して、所払にでもなろうかと心配して居た俺が、松前藩の委員として江戸に上るよ
うな幸運に出会した。何んと人の運命ほど測り知れないものはないではないか。其の理由は斯うである。
恰度其の時蝦夷は幕府の直轄となつて、是迄漁場は取り上げられるという騒ぎが持ち上がったから、殿様も大層心配して町民等にも夫々相談せしめて、意見を聞かれた。各町では五人組といつて五人宛の相談を纏めて、更らに五人組の一人が五人会を開き、斯くして煎じ詰めた意見は、漁場を取り上げられては松前の人民は死なねばならぬから江戸に惣代人を上せて嘆願する事になつた。

▲委員に選定さる

江戸に上つて其の筋に嘆願するとせば、案内者を頼まねばならぬ。まだ江戸に上つた事もない人が多いし、江戸の町は一向不案内であるから、江戸から来て居る人々に頼んだがよからうというので、其の時江戸から来て居った俺等五人に頼んで江戸に行つてどんな運動をするかと俺等に意見を聞いたから、俺は江戸のきようかくしもんたう 俠客新門辰五郎の乾児であるから、新門の親分の手から旗本でも御老中でも願つて見ましよう。親分が一肌脱いで呉れたなら、御老中を動かす事は朝飯前の事サと、とてち 唐梯地ほう といひ法螺ぎよばうけおいにんを吹いて漁場請負人等を煙けむに巻いた。他の奴等も奴等で、俺の上を越して、己おれは小石川の水戸様に出入して居るから、水戸様に助成して貰うとか、俺は紀伊様の兄弟分ですの、好い加減な嘘八百を並べて、自分の豪えらい事を広告した。俺などは新門を担ぎ出した位はまだ罪の軽い方でしたよ

▲百八十人の一行

漁場請負人は伊達、栖原を始めとして巨万の富を積んで居るものばかりであつて漁場を取上げられては大変であるから、金を惜しまずに運動させて、俺等江戸ツ子の五人には、一人に付き三百両宛うすの旅費を呉れ、町民の惣代人等と共に江戸に上のぼせる事になった。何んでも人数が多ければ、国内の大事だと思つて、お上でも屹度いしど聞いて呉れるというので、誰れ彼れと誘つて、六十人宛うす三組となつて、驚くなかれ百八十人も上つた。松前城下の騒動は更なり。道中での評判は大したものであつた。俺等は三百両も懐中わこししてるので、面白可笑おもしろおかしき道中をかけて、兎とに角無事に江戸に着いた。

柳川熊吉翁語り残し「十五」

▲山下奉行の卓見

漁場取上げは、松前家の浮沈に関する大問題である。漁場請負人等は自分等の家業を失うし、城下は起つか漬れるかという騒ぎであつたから、此の問題の起つてからは一ヶ月余りも相談だとか集会だとかで日を潰して仕事も碌々出来なかつた。国詰めの家老や請負人や町民などは拳こぶしつて、江戸行きに賛成したが、たつた一人反対を唱えた。夫れは其の時の松前奉行山下という人であつた。国論が殆ど一定したにも拘わらず江戸へ直訴などは却つて松前家の運命を危うくするものである。そんな不穩当な運動を止めたほうが

よかろうと主張したので熱狂して居る藩士も町人も、山下は国賊であると誓り、果ては斬殺して了えと激昂して山下の屋敷に押蒐けるものもあつたので山下は家に居ることが出来ないで光善寺の方丈に頼んで寺に隠れた程である。そんな風であつたから騒ぎは一通り出なかつた事は知れる。併し後になって見ると何方が国賊であつたか、俺等も罪な事をしたものだ。

▲江戸家老の狼狽

松前から直訴の団体が上つたという事が俺等が江戸に着く前に、江戸詰の家老に聞えた。其の連中は江戸を横行して何処の屋敷へでも出入りしては松前家の恥辱になるから。詰合の人々は頗る狼狽して江戸の入口に待受けて皆んな百本杭の大川端にある松前家の上屋敷に連れて行つて、門の内から外へは一步も出さない。体の好い牢屋入り見たいなものである。案内して行つた江戸の人だけは自由に出入りを許したから俺は新門の親方の所に挨拶に行つた事もあつたが、唯、松前の人々から案内に頼まれたというだけで俺等は煽動して来たともいえず、二三度ご機嫌を伺いに行つたというに過ぎない。松前から来た人等は閉門に逢つて如何する事も出来ず、上屋敷から中屋敷に移されたが矢張り閉門同様で外出させない。皆なが憤慨どころか今度は笠の台が恐ろしくなつて来た。斯うして首でも斬られるんじゃないかという心配が出て来て、直訴の話は爪の垢ほども出なくなつた。

▲生命辛々逃帰る

いのちからがらにげかえ

如何なる事かと、一同安き心もなく日を暮らす内に、江戸には何も用はないから、帰国したい人は早く帰れと言ひ渡された。そうすると我れ先にと帰国を申出でて、初めの元氣は何処へとやら、萎れ返つて帰国を願つた。偶には二三日も江戸見物をして行つてはと勧めても、後の祟りは恐ろしいといつて散り散りバラバラ逃げるが如くに帰途に就いた。江戸詰合の取扱はそんな風であつたから俺等は誰も恨んだ人もなく欺されたと思つた人もなかつたが、之れが始めの話の通りに、新門の親方に行くとか水戸様に連れて行けとか強請まれたならば俺等は雲隠れせねばならぬと覚悟して居つたに、願つたように出来たので俺等も

別に顔を汚さずに済んだが、よい馬鹿を見たもんだ。俺等はお蔭で久振りに江戸を見たが、大金を出した人々にも気の毒である。

柳川熊吉翁語り残し「十六」

▲仕方なしに戻る

折角江戸まで連れ出したが、不首尾で面目ないような気がしたから、請負人や町の人々が戻った後に残つて、何か仕事を見付けようと方々駆け廻り廻つて、人にも頼んで見たが、辰浪は未だ自分を狙つて居るようであるし、四五年も江戸に居なかつたから誰れも世話して呉れる人もないし仕様事なしに、福山の斯し勝を頼るより外の身の振方は付かない。幸いにも福山の人々は、今度の失敗は自分等の為でなく、江戸詰の家老等が圧制したからだと思つて居るので、福山に行つても顔向がならないという程でもあるまいと思つて、皆んなに遅れてブラブラ青森から福山に戻つて来た。

▲函館東屋に來た

スシ勝の許に遊んで居ると、前から知合であつた東屋というのが、函館で女郎屋を開業するから俺に手伝に来て呉れとのことであつた。之れを幸いと函館に来て東屋に厄介になつていたが、其の時の山の上の繁盛は素晴らしいもので、毎夜大門閉め切りの全盛であつた。話に聞いた金の成る木でもあるのかと思う位であつた。俺の來た翌年には山の上に見番も出來て、諸国の商人や漁場請負人等の懐中の金を、まるで箒で掻き集めるようであつた。

▲非常方から町兵へ

見番が出來た所で取締等が俺を見込んで見番の非常方になつて呉れとのこと。非常方とは火の番のようなものだが、其の外には芸妓屋とお客とのゴタゴタを捌いてやつたり、抱主と芸者の押着を片付けるのであつて、随分幅の利けたものであつた。所が横関という人は、世の中は大層物騒になつて、何時黒船の襲い來るかも知れず、幕府の備えを待つまでもなく自衛の方法を考えねばならぬというので、町兵を募つて

軍の稽古を始めた。俺は非常方であるから是非町兵になつて若者を指図するようにとのことで、無理無理俺を町兵に入れた。

▲英吉利兵式稽古

横関は英吉利流の兵式を習得したと見えて町兵に英国兵式を習わせた。恰度今の支庁の上に馬場があつたから、其の馬場で稽古するのであつた。稽古するにはクリ袴を穿いてツツポを着るのだが、誰れも之れを着るものはなく、今の消防夫の着て居るような刺子というものの着て稽古するのだから其の動作は全くなつて居らぬ。俺も始めは着ることを好まなかつたが、逆ても見て居られないで俺から着初めた。それでも矢張着たがらなかつた。

▲鉄砲を打たせる

小銃を買い集めて、鉄砲の取り扱い方や発砲の姿勢方法などを一通り教えたもんだから、町兵等は実弾の射撃をやつて見たくも仕方がない。教師に向つてぜひ実弾を射たせて呉れいとせがむので、教師等もほとほとあましたが、遂に一策を案じて、日比着ることを好まぬ稽古着を着れば、実弾を撃たせるという条件をつけたので、さあそうになると我も我もと先を争つて、稽古着を着るようになった。其の代り函館山の烏がお蔭で吃驚して、居所を失つたという風であつた。

柳川熊吉翁語り残し「十七」

▲仏蘭西式の兵術

彼是してる間に仏蘭西の士官なども函館に来て、軍用金も貸すし、兵器も貸すから、仏蘭西の兵術を習えと申し込んだそうであるが、其の爲めであつたか如何か知らぬけれども兎に角、仏蘭西流の兵式を習う事になった。俺は其の時は身体が悪くて、能う習わなかつたが横関から無理に強いられて進まぬながらも稽古に取り掛かつたけれども、今で言う所の器械体操をやらせるので身体は利かない、逆ても棒に捉まつて

引つ繰り返つたり高き処を飛越えるなどは俺には出来なかつた。若い人等は能く出来てあつたが、仕舞まで我慢が出来ないで俺だけは途中で止めて仕舞つた。しまい

▲ライスの牛を銃殺

其の時米国人で、領事として駐在してあつたライスという人は、牛を飼つてあつたが、如何した過失か山八という人の倅が其の牛を銃殺した。ライスが怒るまい事か、牛を殺した若者を銃殺せねばならぬと怒鳴つて聞かない。其の時の外国人といへば、非常に威張つたもので、日本人などは全く人間の如に思つて居なかつた。無理乱暴な事をして、誰れと咎めるものはなく、幕府の役人すら手を付けかねて居たのだから、其の我儘ッたらなかつた。若し、若者を出すことは出来ぬなら金五〇〇両出せとの談判である。

▲領事館に乗り込む

山八も分別に余つて居れの処に頼むに來た。そこで俺も打棄つては置けず、領事館に乗り込んで談判を開いた。牛を殺したから金を出せとは聞こえるが、金を出さねば其の人間を殺すというのは如何いう理由だと、アベコベに啖呵を切つた。ライスの言うには、牛も生き物であるから人間と変わりはないという。多分、然う来るだろうと思つて行つた事であるから、待つて居ましたとばかりに、そんなら牛も人間も同じであるという事を書きなさい。然うすれば立派に殺されましよう。其の代わり五百両の金を持って來て貴方の生命を買いましようと言ひ付けたらライスも俺の権幕に怖氣がさしたか如何しても書かない、書かなければ此方でも勝手にすると大威張りで出て來たが、まだ安心は出来ないから

▲柳田翁に相談す

其の足で、丸本柳田翁の意見を聞くに行つた。翁のいうには、お前の量見ならば、其処らは上出来だろう。まあ放つて置け、若し重ねて文句を言つて來たら、今度はおれは相手になつてやろう。毛唐の一人二人愚図り出したのにビクビクして居つては、今の騒々しい世の中に生きて居られるか。明日にも露西亞が來るか、幕府の脱走兵が來るか、人民安き心もないのに、牛の一匹二匹殺したとて文句を付けるような

外国人なら此方から片付けて仕舞へ。夫れより殺した牛を如何した、何故持つて来ないのか間抜けな事をしたもんだと、散々叱られたから成程牛を取つて来れば結構な酒の肴が出来たものと狼狽えて取るに行けば、上手のものもあるので、小使いの啓助という者は五十円に売り払つてチャンと口を拭いて居つたには俺も開いた口が塞がらなかった。

柳川熊吉翁一人語り「十八」は函館市中央図書館に所蔵がなく欠落

柳川熊吉翁一人語り「十九」

▲官軍方の探偵だ

怖々ながら、迎えに来た士官に連れられて赤船に行った。初めて見る外国船の立派さ、其の大きいのと丈夫な事は、所謂親船に乗った気で、我ながら心強く思った。案内さるままに、或る一間に通うて見ると綺麗な敷物の上に椅子卓子が並べられ、室内の額や飾物などは目を驚かさばかりである。何とかいう西洋のお茶を呑んで居ると、洋服を着た日本の若い紳士が二三人出て来て、椅子に腰を掛けてから上席の人は先ず口を開いて、天下の政權は、再び朝廷に復かえった事と、人民は悉く天子様に忠義をせねばならぬ事などを論して、吾々は国内の騒動を鎮めようと苦心して居るのだから、函館奉行所の永井玄蕃に面会するように取り計らつて呉れと言われた。其の方々は田島圭助さんと井上馨さんであつた。

▲永井玄蕃に通ず

如何いう用談か知らないが、言われた通りに永井さまに伝えた。下役と相談したるに、官軍方といえは面会する必要はないという論が盛んであつたが、流石は玄蕃さまは上役だけに、先方から官軍の探偵だとも乗つて来るくらいであれば、何も恐るるには足らない。何の用だか聞いたうえで、此方で承諾するともせぬとも、勝手に返答することが出来る訳であるから、兎に角面会しましょう。併し此方から船に行くことはならないから必要とあらば捌所まで来いとの挨拶であつた。そこで私は再び小船に赤船に行き其の旨

を答えたら、何処でも場所は構わぬ、面会すれば好いからというので私の小舟に乗って、二人は税関前の捌所わかれどころに上陸した。

▲官幕使臣の会合

捌所わかれどころで田島、井上の二人は、永井と密議ひみつぎを凝こめてあつた。其の席には誰も加わらないから、何事の打ち合わせをしたか、更に知る事は出来ないが、犬猿けんおんならざる所の、朝廷の方と幕府の方との会合だから六ヶ敷い顔でもして別れるのかと思つて居たら、大層打ち解けたような面持ちで、是れから五稜郭に行くのだから、俺にお伴をすれとて俺は永井さまの風呂敷包みを背負い、田島井上の案内に立つた永井の後ろうしろに跟したがいて五稜郭に入った。下々の者ならば、敵味方と別れたうへは、見当たり次第に闘会なぐりあひでも始める所だが其処は腹の大きい人々は違つたもので、明日にも西と東に分かれて軍いくさをするか知れぬのに、互いに談わらり笑つて一緒に歩くなどはなんと奥床しいものではないか。

▲田島を宅に隠す

五稜郭で良々ひんげん暫く相談をした様子であつたが、永井さまから呼ばれて其の席に出ると田島さまは船に泊つて居つては何彼に不便である。さらばといつて郭内にお泊め申す事も出来ず、お前の所なら誰れも気が付くまいから、お前がお宿をすれとの命令でありました。俺は官軍方の人をお泊めすることは、危険で仕方がないから、成るべくお断りしようと思つて、色々都合が悪い事を申し上げたが、永井さまはどうしても聞かない。お前の宅の外には、お泊めする所はないから、是非引き受けろ、後の事は私は不都合のないように取計とりはからつてやるからとの事で、実は止むなく田島さまのお宿をすることになりました。

柳川熊吉翁一人語り「二十」

▲用心堅固の隠家

俺の家は其時今の船見町にあつて、ハウルさんの隣りになつていたから大層都合が好かつた。其の時は外国人の屋敷には、承諾がなければ設令役人でも踏み込むことは出来ないことになつていた。俺は元來賭博が好きであつたから、家を造る時から逃げ口を拵えておつた。恰度ハウル屋敷に添いた方の座敷には。床の間があつて其の床の間の掛物の影には、壁を切り抜いた遁口を拵えている。

平生は掛物を取つても、一寸目に付かぬように巧く出来ておつて其の遁口の裏には、更らに半間位の廊下があつて、其の廊下の床下から外に出られるようになってゐる。此の廊下は母屋として建てた一部であるから、外から見ても床の間の影にこんな抜口があるとは誰れにも気付かれない。今までは此の抜口を用つたことはなかつたが、官軍の方を幕軍の勢いの昌んな処に泊めて置くのだから、少しも油断は出来ないと思つて、此処に隠して置いたのである。

▲果して幕軍の夜襲

田島さまばかりだと思つたら、井上さまも一緒であつた。家の人々にも能く言い含めて、決して泊り人があることを言わせなかつた。けれども隠すより顯わるるはなしで、二人は一寸も外出はせぬが、時々永井さまからの使者があるの、人の出入の激しい遊郭内のことであるから、誰れ言つとなく熊吉の宅に官軍の人は隠れてゐるとの評判は立つた。俺は別に官軍だとか幕軍だとかは然う分け隔てを立ててゐるのではないが、兎に角沖口番所には官軍が来るかというので番をしておつたのだから、言わば幕軍である。夫れに官軍を泊めて置いては仲間の者に言い分が立たぬが、俺を見込んで頼まれて見れば此の二人は殺させることは出来ない。自分の身に代えても助けて上げようと決心しておつた。彼是れ五十日もおつたでしょうが、其の内に三番隊というのが最も官軍を憎んでおつた。其の三番隊に此のことが聞こえた。血氣に逸る若者どもは、今は官幕の開戦目の前に迫つてゐるのに熊吉官軍に裏切りするとは不埒であるといつて、俺の家に夜責めに來た。こんな事があるうと思つて前からハウルにも頼んで置いたし、二人の方にも抜け口を教えておつたから夜襲の来るや否や二人を逸早くも隣のハウル社に逃がして仕舞つた。三番隊の隊長は俺と口論の揚句、家捜しをして見たが、何処にもいる様子がなので、手持ち無沙汰に引揚げた。夫れから

ハウル社から又十の蔵の処にポータという英国人がおったから、夫れに頼んで沖に碇^{とまり}ついていた官軍方の船に送つて遣つた。其の時は随分危険であつて、今思うても背中がヒヤヒヤするようであつた。

▲榎本子と初面会

其後間もなく、幕府の脱走兵は函館に来て函館戦争となつた。榎本釜次郎さんも五稜郭に入つて、苦戦されたとは皆さんもご承知であるから、戦争の話は省きます。俺も五稜郭に出入りして、榎本さんのお顔を見ましたが、戦争の時には別に榎本さんと名乗合つて、お話をしたことはありません。軍が治まつてから、榎本さんは露国の公使になつた。暫らく彼方にお出になつている間に俺は東京に行つて井上さまにもお目にかかつて色々普譚^{むかしがたり}をしたこともありました。夫れから榎木さまは露国から歸つて函館にお出でになつた時、始めてお目にかかつてお前は熊吉であつたかというお辞^{いひ}が抑々榎本様^{えのくもさま}にご最^{ひさ}員^{ごん}になつた始めでした。

決して戦争当時から知つておつたということではありません。それがご縁^{ぐゑん}で碧血碑^{へきけつひ}を建てたり、井上様や松方様などにお目通りを出来たりして、自分では非常な名譽なことを思っています。

▲更科蕎麦の開業

わし やちがしら せうしなそば
私が谷地頭に更科蕎麦を開業したときは明治四年で、其の時谷地頭には十二軒しか家は建つていなかった。其の時のことを思つといろいろ面白いことがあります^{きれきれ}が、夫れは断片^{つひ}の話で別に連絡^{れんらく}いた一代記という訳でないから、何れ折があつたら又思い出して話しましょう。

「終」